

## 《頼政》ではなぜ足利又太郎の活躍が描かれているのか

天野文雄

小論の標題をこのような問いかけにしたのは、《頼政》についてのこれまでの論や解説の多くが、後場の頼政の亡霊による回想において、三百余騎を率いた平家方の若武者足利又太郎忠綱のあつばれな渡河のさまについて言及しながら、《頼政》の後場がなぜそういうかたちになっているかについては触れていないからである。

たとえば、昭和六年の『謡曲大観』（佐成謙太郎氏）の「概評」では、《頼政》が《朝長》《実盛》とともに三修羅とされる重い曲で、シテが老将であり、歌人であり、舞台が名所宇治である点に底知れぬ味わいがあるとしつつも、その詞章については、

前段で、宇治の名所舊跡を語り合つた後、殊更舞臺を平等院に改めて、頼政敗死の事を述べた上、後段では、クセと語と二節續けて、官軍の様を餘りにも委しく語つてゐるのである。脚色がやゝ冗漫に流れた嫌ひがあるのである。

としているが、この「餘りにも委しい」「冗漫

に流れた」「官軍の様」の中心が足利又太郎の若武者ぶりの描写なのである。もつとも、『謡曲大観』では、これに続けて、

しかし、かうした缺點ゆとりのある所に、主演者の努力を思ふがまゝまに發揮する自由が與へられてあるのであつて、一讀冗漫の如くに見られるその詞章も、なほ讀み返して見ると、前後よく連絡してゐて、「知章」のやうに少しも重複してゐない。そこに脚色行文の苦心が窺はれて、結局凡作と見なすことが出来ないのである。

として、《頼政》は最終的には凡作にあらずと総括しているのだが、頼政の亡霊がなぜ「官軍の様を餘りにも委しく語つてゐる」のかについては、「前後よく連絡」しているとしていただけで、それ以上のことは述べられていない。ほぼ同時期の昭和十年の「解説謡曲全集」（野上豊一郎氏）では、足利又太郎の活躍についてはまったくふれられていないが、戦後になると、昭和三十五年の『日本古典文学大系』謡曲集』、昭和六十二年の『能・狂言事典』、平

成十年の『謡曲百番』、平成二十四年の『能楽大事典』などが、《頼政》後場における足利又太郎の活躍を特記している。その一例を『謡曲集』の「主題」の項の記述で紹介すると、「老武者頼政の最期の奮戦ぶりを扱つた能だが、その心根を描くというよりも、合戦のさまの描写に重点が置かれ、敵がたの忠綱の活躍の方がかえって生き生きしている」とある（この項は横道萬里雄氏の執筆）。しかし、これらではなぜそのような形になっているかについては言及がなく、管見では、八嶋正治氏が、「勝者と敗者の対立を通して、敗者の悲しさを際立たせて居る」（『世阿弥の能と芸論』）としているのが唯一の例外であるが、これほど足利又太郎の活躍に筆が費やされていることの意味についての考察がなされないかぎり、作者世阿弥が、《頼政》にこめた作意（主題、趣向）はわれわれのものにはならないのではないだろうか。

《頼政》の後場では、なぜ足利又太郎の活躍に筆がさかれているのであろうか。それは私見では、この世を「仮の宿」とみる仮世観を主題とした《頼政》にあつて、宇治川をはさんで戦われた橋合戦がこの世のはかなさを象徴するものとしておかれているからであると思われる。《頼政》が「宇治」という、前世と来世のあいだの中宿を暗示する名所を舞台として、現世のはかなさを主題とした作品であることは、相良亨氏の論『世阿弥の宇宙』を補強する形でかつて論じたことがあり（拙稿「夢の憂

世の中宿の『頼政』の主題と趣向―『能苑遺逸』(上) 世阿弥を歩く』所収)、そこでは前ジテの「申すにつけて我ながら、よそにはあらず旅人の」の「旅人」を、「前世から来世に向かう途中の旅人」ととらえなおして(この「旅人」はそれまではワキの僧と解されていた)、この世を「中宿」とみる(『頼政』に示された世界観について述べ、それが前場における中宿宇治の分厚い描写の理由だとしたのだが、後場の足利又太郎の活躍については、ごくかんたんに、中宿のはかなさの具体例だと指摘するにとどまっていた。しかし、すでに述べたような平家方の武将や足利又太郎の活躍に費やされた描写の量に留意するならば、それは中宿たる現世のはかなさの具体例として、『頼政』の中心に置かれていることは明らかで、『頼政』について論じる場合には、そのことはなにをいってもまず特筆されるべき基本的なことであつた、といまにして思うのである。

そもそも、頼政の亡霊は、つぎのような述懐をもつて登場しているのであつた。

頼政、血は涿鹿の河となつて、紅波盾を流し、白刃骨を砕く、世を宇治川の網代の波、あら閻浮恋しや、伊勢武者はみな緋緘の鎧着て、宇治の網代にかかりけるかな、うたかたの、あはれはかなき世の中に

地、蝸牛の角の争ひも  
頼政、はかなかりける心かな

頼政は、このように生前の壮絶だった合戦を回想し、そうしただきごとがあつたこの世を「恋しや」としながら、最終的にはそれを「はかなき世の中」の「蝸牛の角の争ひ」と述懐しつつ現われてくるのだが、問題にしている足利又太郎の活躍はこのあとに置かれているのである。ここでこの世のはかなさの譬喩とされている「蝸牛の角の争ひ」は、いうまでもなく『莊子』則陽に由来する「つまらぬ争ひ事」の謂で、わが国では、それを受けた白楽天の「蝸牛の角の上は何の事を争ふ、石火の光の中にこの身を寄せたり」(『和漢朗詠集』無常)によって成句として流布したものである。蝸牛の角の争ひ、旧稿で指摘した『頼政』の主題をふまえるなら、それは頼政個人が体験した橋合戦であるとともに、源平両家の闘争あるいは興亡という歴史的なできごとでもあつて、『頼政』の作者はその両方を蝸牛の角の争いとみていることになる。

以上が標題にかかげた問いかけにたいする筆者の答案であるが、そう思つて、あらためてこれまでの諸注釈をみてみると、「蝸牛の角の争ひ」については、もちろん『莊子』や『和漢朗詠集』に言及しているが、この譬喩を頼政の亡霊の回想と関連させたものはないようである。しかし、この譬喩こそ、『頼政』という能の主題そのものであることは明らかだと思ふのだが、どうであろうか。

さいごに、以上の私解の補強になるかと思

われることを三点ほど記して、この稿を閉じることにする。

その一は、「蝸牛の角の争ひ」は『和漢朗詠集』の白楽天の詩をふまえているが、その詩は『和漢朗詠集』では「無常」の項に配されていること。『頼政』では、当然、そのことがふまえられているのであろう。

その二は、前引の詞章に引かれている「伊勢武者はみな緋緘の鎧着て宇治の網代にかかりけるかな」は、『平家物語』橋合戦では頼政あるいは嫡男仲綱が平家の武者を嘲つて詠んだ歌であるが、この歌は『頼政』にあつては、この世のはかなさについての述懐に転用されていること。つまり、この歌には、『頼政』の後場で語られる平家の若武者のあつぱれな活躍も、所詮は中宿における些事であるとの含意があると思ふのである。

その三は、このようにみてくると、『頼政』の主題歌とされている終曲部の頼政の辞世「埋もれ木の花咲くこともなかりしに身のなる果てはあはれなりけり」は、頼政個人の感慨であるとともに、より普遍的な世界観の提示として配されていると解するのが妥当であろうこと。また、同様の世界観を主題とする筆者が理解している『清経』や『江口』を世阿弥が制作していることを考えあわせると、これは『頼政』という能の主題というだけでなく、人間世阿弥の思想でもあつたかと思われるのである。

(大阪大学名誉教授)